



# CLINICALPATH NEWS

Japanese Society for Clinical Pathway  
日本クリニカルパス学会

No.  
22

発行日  
2009年9月30日

in 熊本

## 第17回済生会熊本病院パス大会 見学会に参加して

2009.2.13

新東京病院 看護部 乾 憲司

当院では、7月からDPCを導入するにあたり、クリニカルパスの重要性が高まってきています。そこで、どのように院内教育を行っているのか、また、どのようにパス大会を開催しているのかを学び、今後の当院のパス委員会の方向性と活動の内容を考えるために済生会熊本病院で開催された第17回公開パス大会に参加させて頂きました。

まず、院内パス大会の前にTQM部の副島先生、森崎さん、小妻さんによるアウトカムとバリエーションの基本、バリエーション分析の実際とフィードバック、そしてバリエーション分析の実践の講義がありました。アウトカムの考え方やバリエーション分析を行い、いかに良いパスにしていくのかを学びました。

次に、脳梗塞パスのベンチマークとして、医療やケア内容とアウトカムの比較を行いました。済生会熊本病院で実際に使用されているパスと、他の病院で使用されているパスや、DPC公表データによる全国比較で脳梗塞入院件数と在院日数を用いて比較しました。治療方法(検査、薬剤、ケア、リハビリなど)を比較してみると、病院ごとにさまざまであり、興味深いものでした。

次に、第68回院内パス大会を見学させて頂きました。「脳梗塞パスのバリエーション分析」の題で、神経内科部長、医師、看護師、理学療法士、医事課からそれぞれ、脳梗塞地域連携パスについて治療、看護、リハビリ、DPCを絡めた原

価計算と内容深いものでした。

当院は、千葉県の松戸市にあり、地域中核病院です。地域連携パスは整備されておらず、パス作成には、地域がなかなか難しいところもあります。病院の役割を考えての地域連携パスを今後作成できればと思いました。

今回、見学会に参加して、何のためにパスをやるのか(パスの必要性)、我々の医療は本当に正しいのか、我々の行う医療が本当に良い結果をもたらしているのか、今よりもっと良いやり方はないのかを考えて、医療の質を向上させていかなければならないと思いました。医療の質とは、早く、安く、安全に、確実に治す。早く=効率よく、安く=医療の標準化、安全に=リスク管理、確実に治す=治療成績であり、クリニカルパスは効率化と標準化にあたり副島先生からお話がありました。当院でこれらを実践するには、院内全体にパスに対する知識の向上をしていく必要があります。

全職員に教育をして、DPCを導入しても医療の質を維持できるようにしていきたいと思います。パスの普及には、やはり医師の参加が不可欠です。当院の場合、パス作成やパス大会などには、恥ずかしながら医師の参加は皆無に等しい状況です。見学会では、全職種が参加し病院一丸となり盛り上げているところに感激しました。

今後、院内教育の目的として、パス大会の回数を増やし、大会中に勉強会を取り入れていくとともに、各診療科の医師にも協力を得て、各科のバリエーション分析や、新たなパスの作成などを進めていこうと思いを新たにしました。

見学会に参加できたことで新たな視界が広がりました。また、機会があったら参加したいと思います。



in 大阪

## 第5回クリニカルパス教育セミナーに参加して

2009.6.27

聖隷三方原病院 泌尿器科 永江浩史

約300名の参加があり、山崎紳副理事長のプロローグの後、山中・今田両先生の明解な司会でセミナーが始まりました。

副島先生の基調講演では、大腿頸部骨折地域連携パスの実例から地域的な差と地域連携に必要な要素としての療養病床の重要性を再確認しました。

船田さんの退院調整連携パスのお話では、「調整」とはいうものの、実際の中身は、現場（病棟）が行う退院への患者支援を独自のツールとその運用で「下支えする」介入、であることがしっかり説明されたように思いました。その一方で、退院後の緊急受診施設の導線張りなど、やはりその医療域内の事情（がんセンターと一般病院の責任機能の違い等）に即した支援内容が必要だとも感じました。

住友先生の肺癌地域連携パスと石木先生の心疾患の地域連携パスのお話では、それぞれの疾患の特徴を踏まえた病診連携の推進のヒントとピットフォールが存分に聞けました。普及定着、長続き、その先どんな運用効果の評価をするのか。疾患管理に意味のあるものでなければ、患者のための連携パスとはいえないという明確なメッセージを感じました。また、会場がどよめいた某病院のボーナス減のお話を聞き、「どうせ車買うなら新型プリウスに……」とこっそり思いながら帰途についた参加者も多かったのではないのでしょうか。

中島先生のカルナプロジェクトのお話には、個人的にいろいろ考えさせられました。ガイドライン遵守が診療支援の基本であること（標準化）、慢性疾患の長い経過の中で目標状態の維持・達成のモニタリングを請け負っている点

（患者／介入アウトカムのチェック）、患者と担当医をコーディネートするしくみになっていること（患者中心に展開）、などです。パスという体裁の仕組みではありませんが、全て、慢性疾患の地域連携パスの中に盛り込まれるのが望ましい、疾患管理に不可欠な要素ばかりです。小生が個人的に好きになったのは、第3者機関が世話を焼く、というスタイルです。われわれ医師は、診療の仕方・投薬の仕方が自分の裁量権（or 責任）と考える割には、しっかりしたケアを行えていない実情があります。専門外の疾患ガイドラインは数が増えすぎて自力では十分には使いこなせませんが、ガイドラインを踏み外さないように優しくアラームを鳴らしてくれる方がいれば、患者対応に集中できます。それなら多少コストをかけても是非お任せしたいです。カルナプロジェクトは「新種のスタッフの活動・コストの容認」が条件となるわけですが、今の自分たちの環境で地域連携パスにどう反映させて考えたらいいか、よいヒントになっている気がします。小生は思わず、がんの再発治療期や緩和ケア期のイメージを重ね合わせました。緩和ケア期の多彩な心身の問題点を、緩和専門医ではない自分らが、あれもこれも一人で背負おうとするのは所詮患者のためにはならないからです。医師が自らの裁量権を積極的に減らし、意欲的な他職（専門職）の力を借りながら自分も楽になりながら患者ケアを良質なものに（粗悪にならないようにする）。われわれ医療業界が地域連携の責任分担くらいどんどん進められないと、本意でもないのにワークシェアリングを強いられている他業界の多くの方々が浮かばれないような気さえました。多職種の力量の結集という今後の地域連携の重要な課題については、河村先生と一緒にオーガナイザーを務めさせていただく12月の第10回日本クリニカルパス学会学術集会シンポジウムでも、是非皆さん、一緒に考えてください。

● ● ● ● ●

in 東京

## 第5回クリニカルパス教育セミナーに参加して

2009.8.1

小諸厚生総合病院 クリニカルパス専任看護師  
小林美津子

「第5回クリニカルパスセミナー」に参加しましたので報告します。今回は当院のがん化学療法認定看護師と参加しました。





当日、東京は冷夏でしたが、セミナーの講演は講師の先生と共にとっても熱い内容でした。

副島副理事長から、パスの基本となる目的と連携の意義からアウトカム設定など、パスの概論をわかりやすくご講義いただき、院内・外共に医療の質管理の重要性を再認識しました。山形県立中央病院の今野さんの講演では、同じパス専任としての看護師という立場から、院内・外の橋渡し役としての連携の立ち上げ・関わり・問題点などを、とても興味深く聞かせていただきました。今野さんのさまざまな問題を抱えながらも「看護の心」を基本に活動されている姿に感銘し、連携には各施設でのコーディネーターの人員配置の必要性も実感しました。済生会横浜市東部病院の長島先生の胃癌大腸癌の連携では、連携先の視点に立ったパスの作成と、同じ診療機能を持つ基幹病院とのネットワークの構築の確立までの経緯のご講演で、連携の核となる病院と基幹病院との連携、医師会の参加や理解の必要性を感じました。武蔵野赤十字病院の朝比奈先生の肝炎・肝癌の地域連携パスからは、肝癌の予防策として肝炎の継続治療と管理の必要性を、治療のガイドラインや研究データからわかりやすくご講演いただき、地域連携管理の重要な疾患であることを再認識しました。前橋赤十字病院の堀江先生からは、現在でも多い喘息死を連携パスでゼロにする取り組みのご講演で、ネットワークの構築と喘息カードの導入やエビデンスに基づいた診療の標準化を地域連携パスで確立し、その成果が紹介され連携の必要性を実感しました。また、総合討論で副島先生から、パス内容を簡略化しすぎると、質の評価に重要なデータの分析に影響が起ることも問題提起されました。地域連携パスには、まださまざまな問題はありますが、基本は院内連携であること、地域の医師会や核となる病院同士の連携の重要性そしてコーディネートする人材が必要であることを学ぶことができました。個人的には今野さんの山形の観光名所や堀江先生の超高速プレゼンも楽しんで聞かせていただきました。また、最大の成果として、参加したがん化学療法認定看護師

は、熱いご講演にとっても良い刺激とパワーをいただき自分なりの目標ができたことです。セミナー以降目の輝きが違います。この輝きがいつまでも続くことを願い、講師の先生、司会の岡田先生、今田先生、事務局の皆様にご感謝申し上げます。



## リレーエッセイ 第16回 医療連携とパスが繋がった

東京女子医科大学病院 下村 裕見子

「大腿骨頸部骨折地域連携パス」の講演をはじめて聴いた時の衝撃は忘れられない。その当時、連携実務者の発表はと言えば、「広報ならびに営業活動により紹介率がアップした」という内容が大半であった。近い将来、地域連携パスが連携ツールになると確信し、かつ連携室がパス活動に関与することにより、院内・院外連携の接着剤になると直感した。

私の脳裏には遠い日の記憶が去来していた。ラハイナルナハイスクール（マウイ島）短期留学中に、現地の同級生と悪戯を企てた。畑に捨てられていたパイナップルを大量に食べて（罰が当たったのか、当然の生理現象か）下痢をおこし、救急外来のお世話になった。むろん症状としては軽かったが、日本から来た高校生ということもあり、経過観察入院する羽目になった。医師による診察を終え、スケジュールが書いてある紙を渡された。いまにして思えば“One day パス”だったのだろう。看護師が病室にやってきて詳細なインタビューがはじまり、急に席をはずしたと思ったら、先ほどの医師が“うつ病”のパスを持ってやってきた。単に英語が喋れなかっただけだったので、すぐに元のパス通りの観察下におかれた。即座に個別対応できる体制にあることに感動をおぼえた。もうひとつの出来事は、学生時代の病院実習でのことである。おおらかな時代だったのか、学生にも患者の栄養指導を受け持たせてもらった。病名と食事箋だけが情報のすべてであり、患者にどんなことで困っているか、どんなことが知りたいかインタビューすることから始めなければならなかった。男性患者の場合、調理法による工夫など、興味をもってもらえず、虚しさだけが漂っていた。事前にプログラムが組めたらと生意気にも感じたのだった。

多職種が参加し効率的なチーム医療を行うためには、各職種がこれから行われる医療／ケアの予定を知り、役割を認識する必要がある。全体を俯瞰し、医療行為の目的や判断基準が理解されてはじめて、チームとしてのベクトルが



▲下村 裕見子さん

一致する。同時に、患者にもこれからの経過を知ってもらい、治療に参画してもらう必要がある。医師は説明したと言う。患者は説明を受けていないと言う。事務職だからこそ、パス活動を通じて、患者の不安・不満を医療者に伝えていくことが出来るのではないか、パスを勉強していくうちにうぬぼれた。

大学病院の中でも遅ればせながら、2003年パス研究会発足、2004年クリニカルパス推進委員会、2005年4月からは専任部署として、クリニカルパス推進室を開設し、本格的に全学的パス導入プロジェクトが開始された。立ち上げならびに運営に少しだけ関与でき、現場の第一線で頑張っている医療者の姿を見て、院内のことをあまりに知らないでいたことに気づかされた。何より協議を通じてコミュニケーションを取ることが楽しい。すべては人から始まる。

大腿骨頸部骨折に引き続き、2008年には脳卒中地域連携パスが保険収載され、がん診療連携拠点病院においては、2012年4月までに「5大がん地域連携パス」作成ならびに運営が求められている。社会的入院の是正は必要だが、地域で適正な医療を安定して提供するためには、地域社会と一般市民がその受け皿になる必要があるだろう。連携実務者には、健全な生活環境を整え、日常生活が支障なく送れるよう直接的ケア介入するものと、疾患別ネットワーク構築・地域連携パス事務局等の間接的業務をするものがある。医療計画、退院支援、病診連携、地域連携パス活動を通じて、医療・介護を提供することが求められている。すなわち少し先（将来、自院以外）を見て、整えることが仕事なのだと思う。地域連携パスの有用性を活用するためにも、パスの神髄がわかる連携実務者を増やしていきたい。

今回は“喘息死ゼロ作戦”の陣頭指揮をとっておられる熱き医師、前橋赤十字病院 呼吸器専門医 堀江健夫先生にバトンを渡します。

## 事務局から



### 活動報告

6月27日 2009年度クリニカルパス教育セミナー(大阪)  
8月1日 2009年度クリニカルパス教育セミナー(東京)

### 今後の活動予定

12月4/5日 第10回日本クリニカルパス学会学術集会  
(長良川国際会議場/岐阜)

# 第10回 日本クリニカルパス学会学術集会

会期：平成21年12月4日(金)・5日(土)

会場：長良川国際会議場・岐阜都ホテル

会長：松波和寿(社会医療法人蘇西厚生会 松波総合病院 副院長)

テーマ：10年目の原点回帰「クリニカルパスのもたらしたもの、めざすもの」

プログラム：クリニカルパス学会 10周年記念講演、特別講演、教育講演、シンポジウム、パネルディスカッション、教育セミナー、特別企画、ランチョンセミナー、一般演題(ポスター)、クリニカルパス発表 など

学術集会の詳細に関しては、学会ホームページ <http://www.jscp.gr.jp/meeting/> をご覧ください。

お問い合わせ：第10回日本クリニカルパス学会学術集会事務局 社会医療法人蘇西厚生会 松波総合病院  
〒501-6062 岐阜県羽島郡笠松町田代 185-1 TEL：058-388-0111(代)